三世の方々が多く参加下さって、パイオニアの方々に敬意を表する事が百年祭の意義であります。何卒万障御出席下さいます様に御願ひいたします」

こういう文章をじっくり見ていると、私には海外日系人社会の体臭のようなものが、ひしひしと感じられるような気がする。

ちょうど日本総領事館が新築され、オープニングのレセプションが行なわれる日にぶつかったので、ヒラヤマさんの紹介で私たちも出席させて貰った。

「このくらい立派になると、私たちも肩身の広い思いをしますよ」

と建築を担当したヒラヤマさんは、いかにも嬉しそうだった。客が多かったために、佐藤総領事とは少し立ち話をしただけだったが、霞ヶ関やその国の政府の方にばかり頭が向いていて、在留邦人やその国に住む日系人のことなどほとんど念頭にない一般の外交官と違って、この人にはもっと素直な人間らしい温かさが流れているように思われた。

レスブリッジの日本庭園。

レイモンドの一夜

カルガリーから、大きなレンタカーを貸りて、吐く息がもう白くみえるほど冷えこんだアルバータの大平原を南に走り続け、美しい日本庭園のあるレスブリッジに二泊したが、ここで会った日系の人たちも、私に忘れることのできない印象を与えてくれた。

案内を引きうけてくれたのはロバート・ヒロナカ博士で、ここの農事試験場に勤めている農業栄養学の専門家。ちょうど奥さんがヨーロッパ旅行に出かけているとかの話で、時間を惜しまず案内してもらうことができた。

最初の日は、夕方からヒロナカさんの生まれ故郷レイモンドへ車を走らせる。レスブリッジからさらに南へ三十分あまり、ここまでくるとアメリカとの国境へもう一息だ。レイモンドというのは人口約二千六百人の農村で、ここには今も二百人あまりの日系人が住んでいるということだし、トロントで会ったレイモンド・モリヤマさんもこの村で生まれ、名前もそのためにつけられたのだそうである。

もう引退したオオイシさん夫妻の家に案内して頂く。するとオオイシさんの奥さんは、腕によりをかけて日本料理を作って待っていてくれた。オオイシさんは今年七十三歳、まだまだ元気で、釣ってきたマスの刺身をすすめてくれた。カナディアン・ウィスキーを傾け、日本料理に舌鼓をうち、日本語で話すオオイシさんの昔話を聞いていると、ふと自分がいまどこにいるのか分らなくなってしまいそうだった。

なるほど、オオイシさんは一九二五年に呼寄せ移民で簡単に入国できたというところをみると、一九二四年に日本からの移民を拒絶したアメリカの場合よりも、カナダの方が人口が少ないだけに、抵抗もそれだけ少なかったといえるのだろう。

翌日は午後からヒロナカさんの案内で、ヴァックスホールにあるカネガワ農場に向かった。一時間あまり広大な農地のなかを走り続けて、防風林のような林にかこまれているカネガワさんの家に着く。

おばあちゃんは八十八歳、当主のスタン・カネガワさんは五十七歳で、弟のリチャードさんと一緒になんと九千エーカーの土地をもっているのだという。一エーカーは約千二百坪だから、まあ自分の畑から太陽が出て、自分の畑に太陽が没するといった具合である。現に弟のリチャードさんの家に向かう途中で、私は壮大な落日の光景を眺めた。

オオイシさん(左)と 友人のムラキ(セイイチロー)さん。

ブタ二千頭、ウシ千五百頭などとカネガワさんはさり気なく話していたが、よく考えてみると、気も遠くなるような数である。

「それでもね、戦争中は奴隷のような生活をさせられましたよ。それで発奮してね、それが今の成功の原因でしょうな」

とカネガワさんは運転しながらいった。リチャードさんの家には、小さな家ならそのまますっぽり入ってしまうほど広いリビングルームがあって、一同はウィスキーを楽しみながら話しあった。

それから二台の車に分乗した私たちは、ブルックスという町にあるカネガワさん兄弟経営のホテルまで食事に出かけた。また三十分あまりのドライヴだが、その間中、兄さんの方は日本の歌のカセットを聞かせてくれた。「裏町人生」、「船頭小唄」、「緑の地平線」、「野崎小唄」などといった昔の流行歌ばかりだったが、じっと前方を眺めながら、カネガワさんは陶然としてこういう歌に聞きほれていた。

「何度聞いても、あきるということがないんですよ。みんな、私の心の歌なんです」

このカネガワさんは、私がそれまでに知っていたアメリカの二世とはまったく違っていた。アメリカの場合は、父の国の日本を忘れ、アメリカ人になりきることが至上命令で、日本の歌を懐しむような二世はめったにいなかったはずだが、それだけアメリカへの忠誠や同化がきびしく要求されたのではないだろうか。カナダでも稀な成功を収めたカネガワさん兄弟を知ったことは、また私に考えさせるたくさんの課題を残したようだ。

ここに紹介したのは、私たちが会った日系人のほんの一部にすぎないし、私たちは日系人だけに会ったわけではもちろんない。しかし私はいま、こういう多くの人たちと、表面的な接触だけではなく、お互い同士心の触れあう友人になれたことを、本当にうれしく思っている。私が好きだと思った人から、自分もまた好かれていると感じることは、人生のもっとも大きな幸福だからである。